



せるげいさん

少年乃慾望はつねに心澄む
ゆゑに悪念なくて

「せるげいさん、せるげいさん」

港湾管理局の玄関に割れた銅鑼の様な声が響く。何事かと思つてせるげいさんが目をやると、白髪頭を涼しく刈り込んだ初老の男が頻りに手を振っていた。せるげいさんの通訳が肘で小突きながら、井関さん、と言つた。ああ、せるげいさんとは俺の事かと諒解したせるげいさんは、不器用な御辞儀で応えた。

「せるげいさん、よく来てくれたねえ。どうだい、元気にしてたかい」

さりげなくせるげいさんの手を取る井関さんの仕草に、せるげいさんは、おや、と思つた。小柄な井関さんの手は思いの外力強く、穏やかに細められた瞼の奥には鋭い眼光が宿っている。せるげいさんは、井関さんが侮り難い井関さんである事を認めた。

「せるげいさん、重たそうだねえ。あたしに持たせておくれよ」

一瞬警戒心を露わにするせるげいさんにはお構いなしに、井関さんはキャリングバッグの取っ手を奪い取ると、カラカラと小気味の好い音を立てながら港湾管理局の駐車場を横切つて行く。せるげいさんとせるげいさんの通訳は顔を見合わせて、やれやれといった風に肩を竦めた。

「せるげいさん、御希望の物は揃えておいたよ。早速見に行こうじゃないか」

井関さんはせるげいさんのキャリングバッグをミニバンの荷台に押し込みながら、さあ乗った乗ったとばかりに顎をしゃくる。井関さんのボディガードらしき大男は、助手席に座ったまま手伝うでもない。良く働く労働者には更に多くの労働を課すべし、とせるげいさんの通訳が軽口を叩く。たとえ自分の親であっても、と鼻で笑う。せるげいさんが目で嗜めると、カウフツィー（孔子）でしたっけ、と惚ける。

「せるげいさん、何せ昨今の不景気だ。この界限もすっかり廃れちまってよう」

ハンドルを握る井関さんが、溜息交じりに言つた。スモークガラス越しに見える港町には融けかけの雪が残っていて、並木道もまだ丸裸のままだ。小樽に着く時分にはサクラが咲いていると聞かされていたのだが、とせるげいさんは残念に思つた。

「せるげいさんとは儲かつてるんだらうねえ、何時も沢山買つてくれるもんねえ」

せるげいさんは中古車のブローカーを営んでいた。共産党体制が崩壊し自由経済に移行して直ぐの事だから、彼此二十年以上になる。膨れ上がる中間層に中古の日本車は良く売れた。何より壊れない。以来、ビジネスパートナーとして中古車の調達を請け負っているのが、井関さんだった。

「せるげいさん、着いたよ。ここだよ」

県道を右に逸れて砂利道を5分ばかり走ると、古びた倉庫の姿が見えて来た。敷地に入るミニバンに向かって、居並ぶ井関さんの従業員達が深々と頭を下げる。井関さんはさり気なく右手を挙げて、それに応じた。

「せるげいさん、ちょっと待っててね」

軋むシャッターが開き切るのもどかしく、背を屈めた井関さんが倉庫に潜り込む。身の軽い男だ、とせるげいさんは舌を巻いた。井関さんの従業員達は後手を組んだまま、せるげいさんを油断無く睨みつけている。倉庫の蛍光灯が、ふっと灯つた。

「せるげいさん、どうだい」

皺嘎れた井関さんの声が、倉庫に反響する。せるげいさんは、ほう、と感嘆した。見事なコレクションだった。軽自動車やファミリーカー、ミニバンにSUVからトラックまで、手狭な倉庫に大小様々な車種が50台あまり整然と並べられている。さて、とせるげいさんは早速算盤を弾いた。せるげいさんがブローカーを始めた頃にはまだ自家用車は高嶺の花で、売れるのは実用車に限られていた。その後瞬く間に広がったマイカー熱の最中では、形式や走行距離を問わず軒に並べる先から捌けていった。幾つかのメーカーが正規代理店を出している今では市場の見る目が厳しくなって、人気、不人気は明瞭りと出ている。一度船を浮かべて幾ら稼げるか、それはせるげいさんの目利きに掛かっていた。

「せるげいさん、見ておくれ。こいつは出物だよ」

白い小型のセダンだった。せるげいさんは車体、内装、エンジン、足回りと舐める様な執拗さで検分する。確かに悪くない。せるげいさんは井関さんの言い値で買い受けた。

「せるげいさん、そいつは3千5百にしておくよ」

軽のワゴンは使い勝手も良く、大柄なせるげいさんでも楽に乗れる。値段もお手頃だ。直に輸入されていない品薄感もあって、儲けは薄いが確実に売れた。2千、とせるげいさんは指を二本立てて見せた。

「せるげいさん、そいつは殺生だ。一体何が不満なんだい」

せるげいさんはドアの内張りの下を指し示した。インクの染みほどの小さな錆が浮いている。仕方が無いねえ、と頭を振って井関さんが折れた。

「せるげいさん、こいつが御希望の車だよ。3万からはびた一文負からないからね」

度々アフリカのラリー競技に勝った事もある大型SUVはせるげいさんの国でも知らぬ者の無い程の人気車種で、実際店にも頻繁に引き合いがある。しかも、鈍いブルーメタリックに輝くその一台は程度も極上で、どうせなら大きく稼ぎたかった。ニエット、とせるげいさんは首を横に振った。

「せるげいさん、お国じゃこいつが5万でも買い手が付くことを知ってるんだ。あたしにだって少しぐらいおいしい思いをさしておくれよ」

せるげいさんは唸った。元よりハツタリのつもりだったのが、井関さんには少しも通じない。せるげいさんは参ったとばかり指を三本立て、左の手を大きく開いて付け加えた。3万5千、渋かった井関さんの表情がたちまち綻んだ。

「せるげいさん、中々の遣り手だねえ。あたしやあ冷汗のかき通しだよ」

いやはや、と頭を掻きながら、井関さんも満更では無さそうだった。既に日も暮れかかって、品定めをするせるげいさんの顔にも疲労の色が浮かんでいる。結局、船に積み込めるギリギリまで買い付けた。

「せるげいさん、御粗末だが酒の席を設けさせてある。ほら、せるげいさんとその船頭さんも呼んであげなよ」

鉄道の駅で待ち合わせて、そろそろと繁華街に繰り出した。青い暖簾の掛かった鮎屋は井関さんの行き付けらしく、亭主に恃むよとだけ言って奥の座敷に上がり込む。せるげいさんのクルー

と井関さんの従業員たち10人程で、長いテーブルを囲んだ。

「せるげいさん、狭い処で申し訳ないが此処の肴はちょっとしたもんだ。酒も好いのを見繕わせた。まあ、ゆっくり寛いでいっておくれ」

近頃、せるげいさんの町にも鮓屋が建ってそれなりに繁盛している様子だったが、やはり生魚に抵抗があって入った事が無かった。恐る恐る口にしてみると程良くのった油が甘い。きりっと冷えた日本酒の果実臭も魚の旨味を引き立てている。思いの外に食が進んで、せるげいさんはすっかり上機嫌になった。

「せるげいさん、一曲どうだい。良い声をしているものねえ」

カラオケか。せるげいさんは歌う事は滅法好きだった。港町と云う土地柄か、せるげいさんのお国の民謡も結構入っている。井関さんの差し出すマイクを受け取ると、せるげいさんはカリンカを歌い出した。

ああ美しいお嬢さん、若い娘心よ

どうか僕を好いておくれ

アイ-リユーリ リユーリ

アイ-リユーリ リユーリ

どうか僕を好いておくれ

「せるげいさん、いやあ見事だ。せるげいさんの後に歌うのが、あたしは恥ずかしいよ」

さよならの裏側には何があるの

涙さえも凍りつく白い氷原

せるげいさんに詞の意味は分からなかったが、井関さんの張りのある渋い喉は故郷の祖母を思い出させて、何故だか無性に泣けてきた。せるげいさんは大きな青い瞳に涙を溜めて、井関さんの歌に聞き入った。

突然、井関さんの従業員の一人が突然気色ばんで立ち上がった。ナニシヤガル、とかそんな事を叫んでいた。見ると、せるげいさんの二つ向うに座っていたクルーが、サムライのつもりだろう、禿げ上がった頭に胡瓜巻を載せて道化ている。井関さんの従業員はクルーの胸座を掴むなり、渾身の力で頬を殴り付けた。もんどり打って倒れたクルーが反射的にトカレフを抜く。これで全て台無しだ、とせるげいさんは覚悟した。その時、井関さんが助手を張り倒し、憤然とトカレフの前に立ちはだかった。井関さんは懐から匕首を取り出すと、黒いピンストラップのシャツを肌蹴て腹に当てた。ハラキリ。井関さんを死なせてはならない。せるげいさんは慌てて井関さんの腕を掴み、力任せに振り上げた。

「せるげいさん、放しとくれ。腹を切らなきゃあ、あたしの一分が立たねえんだ」

井関さんは辛そうに呻きながら抵抗していたが、大柄なせるげいさんには敵わない、とうとう力負けして匕首を落とした。せるげいさんが腕を放すと、人目も憚らず嗚咽を漏らし続けた。暫くそうして肩を震わせていたが、やがて井関さんはきっぱりと告げた。

「せるげいさん、もう帰っとくれ」

船積みの作業は空々しい雰囲気の中で黙々と行われた。井関さんは従業員に指示を出し自らも忙しなく動き回っていたが、せるげいさんには話し掛けようとしめない。せるげいさんは、昨日の丁々発止の駆け引きを悲しく思い返していた。もうこれでお別れなのか、せるげいさんが気鬱なのはその所為だけでは無かった。勿論、ニッポンでの取引先を失うのは怖ろしかったが、それ以前に、せるげいさんには井関さんに告白すべき事があった。

とうとう意を決したせるげいさんが、井関さんに歩み寄る。イセキサン、と口を開き掛けたせるげいさんを、井関さんは目で制した。

「せるげいさん、言わなくていいよ。あたしには、ちゃあんと分かってるから」

せるげいさんは、わじむさんだった。去年の夏、せるげいさんはカムチャツカの港に浮かんでいるのが発見された。せるげいさんは背中を刺されていた。せるげいさんには敵が多かった。同業者、マフィア、テロリスト、官憲、小役人。それは、せるげいさんの国でせるげいさんがブローカーを営む以上、せるげいさんには避け難い事だった。幸か不幸かせるげいさんの商売は順調だったので、会計をしていたわじむさんが引き継いだ。雑事に追われる内に冬が過ぎ、流水が溶けた。船を出せる。せるげいさんのわじむさんは、初めてニッポンの地を踏んだ。

「せるげいさんに何があるかと、あたしにとってせるげいさんはせるげいさんだ」

航海の途中、わじむさんとわじむさんの通訳は、井関さんにどうやって真実を告げるべきかを話し合った。「別にいいんじゃないですか、どうせ連中にとってロシア人は全部せるげいさんだから」とわじむさんの通訳は言った。井関さんの言葉は多分、そういう意味では無いだろう。わじむさんは井関さんの手を堅く握り締めながら、きっとまたニッポンに来ようと心に誓った。買い付けた車がさっぱり捌けて、背中を刺されたわじむさんがカムチャツカの港に浮かぶ様な事が無ければ。

せるげいさんのわじむさんが甲板から見降ろすと、井関さんはまだ埠頭に立って見送ってくれていた。せるげいさんのわじむさんは、深々と御辞儀をした。井関さんは大きく手を振って何かを叫んでいる。ぼおおおっと気笛が鳴って、せるげいさんのわじむさんには聞こえなかった。

せるげいさん

<http://p.booklog.jp/book/97724>

著者：少年乃慾望はつねに心澄むゆゑに悪念なくて

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/sakayshuno28/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/97724>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/97724>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ